

## 優秀作品賞

「私のガン、早く見つからなくてよかった・・・」

佐々木 成聖さん

地方の大きな病院の待合室、多くのお年寄りがいる中で1人だけあからさまに機嫌の悪そうなおばあさんがいる。僕の祖母である。大の病院嫌いで、身体も比較的丈夫であった祖母は、もう何十年も病院に足を踏み入れていなかった。この日、病院には行くまいと必死の抵抗をする彼女を、半ば無理やり引きずってきたのが東京から帰省していた彼女の娘、僕の母だった。

「もう、イライラしとってもしょうがないやろ」

祖母のイライラが、母親に伝染してしまつたらしい。病院の食堂の安っぽいラーメン(これが薄味で意外と美味しい)を目当てに病院に着いて来ていた僕は、間近に迫った大学入試のために読んでいた分厚い参考書の影から、2人の様子を伺っていた。そのまましばらくすると祖母の順番が来た。その日東京に帰る事になっていた僕は診察室には着いて行かず、2人とそのまま別れて空港へ向かった。そのため僕が祖母の健診の結果を知ったのは、母が東京に帰って来た1週間後のことだった。

その日東京の自宅に帰ってきた母は、何処となく暗かった。嫌な予感がした・・・。

手遅れであった。祖母は末期の胃ガンだった。医師によると、余命は3カ月だそうだ。弱々しい声で、そう僕と父親に語る母の目はじわじわと赤くなり、やがて涙が零れ落ちた。祖母はすぐに入院することになったが、間もなく退院した。もちろん、ガンが治ったのではない。人生最後の短い時間を、慣れ親しんだ自宅で過ごすためである。健診から4カ月後、容体が急変した祖母は病院に搬送された。そしてその数日後、2人の娘と夫に見守られながら、静かに息を引き取った。

祖母は生前こんなことを言っていた。

「薬を使ってずっと入院しているような生活はしたくない。そんなんいやー

じゃ。おばあちゃん死ぬときはスパッと死にたいんよ。やけん検査には行かん。死ぬ直前に病院が見つかったら、そんなときはそのまま死ねばええんよ」

また別の日には病院で寝たきりにさせられて、ずっと不味い食事を出されるのは死んだのも同然だとも言っていた。つまり、出来るだけ長く普段通りに生き、死ぬ前の闘病生活は極力短くしたいと言うのである。この意味で、祖母の最期は彼女にとって理想的なものだったのかもしれない。これは母にとってせめてもの救いであった。

この話を聞いたとき、僕は強く共感した。治るかどうかもはっきりと分からない病気を相手に、何種類もの薬を飲みながら病院で長い間過ごすのは嫌である。同様に、自分が病気であることが分かっている、いつ死んでもおかしくない状態で長い間家で過ごすのも嫌である。

こう考えたとき、健診で病気を見つけるのは本当に僕たちの利益になるのだろうか。もちろん、完治が可能な段階で病気が見つければ幸運だし、そのために健診というものがあるのだろう。しかしながら往往にして病気はかなり進行した状態で見つかってしまう。もし祖母のガンが余命1年の段階で見つかりていれば、例え治る見込みが多少あったとしても彼女はもっと苦しむことになってしまったはずである。祖母にとっては、ガンの早期発見は必ずしも望むところのものではなかったと言えるかもしれない。

一方で、病気の発見と死とが短期間に連続した時の周りの人たちの精神的な衝撃には計り知れないものがある。母は祖母の死の後、僕の前では決して涙を見せなかった。大学入試を間近に控えた僕に、余計な心配をかけまいとする母の気遣いだったのだろう。しかし後々父に次のような話を聞いた。母は夜中に目を覚ましては、祖母が亡くなったのが夢だったのではないかと信じ、書斎にいる父に祖母の安否を訪ねた。父が悲しそうな顔をして母に事実を伝えるたび、母は泣き崩れたそうだ。母にとって、母が重病であるという事実を受け止める間もなく、母に死なれてしまったのだ。心の整理の出来ないうちに身近な人が亡くなってしまったら、誰であっても辛いはずである。また他にも、今日の社会にあっては、身辺整理をする時間が限られてしまうことも大きな問題となる。こうした意味では発見が病気の完治には遅かった

としても、病気が発見されてから亡くなるまでに一定の時間があつた方がいいとも言えそうである。

祖母の死は僕にとって、健診によって病気が発見された際の患者への告知の問題、また告知を受けた患者が如何に余生を全うするかという問題を通して、人の生命について考えるきっかけとなつた。

その意味で「健診」や「人間ドック」という言葉は、僕にとって人の生命と直結する特別な言葉なのである。